

2023年度 横浜市立大学 国際教養学部

特別選抜入学試験

【海外帰国生／国際バカロレア／外国人留学生／社会人】

小論文問題

【注意事項】

1. 試験時間は90分である。
2. 試験開始の合図まで、この問題冊子を開いてはいけない。ただし、表紙はあらかじめよく読んでおくこと。
3. 問題の印刷は1ページから6ページまでである。
4. 解答用紙は2枚である。
5. 試験開始後、受験番号と氏名をすべての解答用紙の所定の欄に記入すること。
6. 問題冊子に落丁、乱丁、印刷不鮮明な箇所等があった場合および解答用紙が不足している場合は、手をあげて監督者に申し出ること。
7. 解答は必ず解答用紙の指定された箇所に記入すること。解答用紙の裏面に記入してはいけない。
8. 問題番号に対応した解答用紙に解答していない場合は、採点されない場合もあるので注意すること。
9. 解答する字数に指定がある場合は、句読点も1字として数えること。英数字を記入する場合は、1字分のマス目に2文字まで記入してよい。
10. 問題冊子の中の白紙部分は下書き等に使用してよい。
11. 解答用紙を切り離したり、持ち帰ってはいけない。
12. 試験終了まで退室を認めない。試験中の気分不快やトイレ等、やむを得ない場合には、手をあげて監督者を呼び、指示に従うこと。
13. 試験終了後は問題冊子を持ち帰ること。

〔 I 〕 次の文章は『ペアレントクラシー～「親格差時代」の衝撃』という書籍の抜粋である。

この文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

「ペアレントクラシー」、本書の主題である。ほとんどの読者の皆さんには、あまりなじみのない言葉であろう。

「ペアレント」という言葉は、よく知られている。「親」という意味である。そのあとに「クラシー」という言葉がくっついている。「クラシー」とは、「～の支配」（「～の支配力や支配権」）を表す接尾語である。たとえば、「デモクラシー」は「民衆による支配」を意味し、「アリストクラシー」は「貴族（アリストクラット）による支配」ということになる。したがって、「ペアレントクラシー」とは、「親による支配」、すなわち「親の影響力がきわめて強い社会」ということになる。

ペアレントクラシーという語の生みの親は、イギリスの教育社会学者、フィリップ・ブラウンという人物である。ブラウンによると、ペアレントクラシーとは、「家庭の富（wealth）と親の願望（wishes）」が子どもの将来や人生に大きな影響を及ぼす社会のことである。

ここでブラウンの議論を簡潔に紹介しておくことにしよう。

ペアレントクラシーという言葉が世に送りこんだ「第三の波」と題された論文を、ブラウンが『英国教育社会学会誌』というジャーナルに発表したのが 1990 年のことであった。当時イギリスは、サッチャー首相（当時）の主導による戦後最大と言われる教育改革で大揺れに揺れていた。その教育改革をリードした教育理念、それによって引き起こされた世の中の変化を、ペアレントクラシー、そして第三の波という用語で形容したのであった。

ブラウンは、次のように整理している。

「第一の波は、19 世紀後半に生じた、労働者階級の子どものための大衆教育の勃興によって特徴づけられる。第二の波は、デューイ^(注1)の言う『事前決定という封建時代の常識』にもとづく教育の供給から、個人の業績や能力にもとづいて組織されたそれへの変化のことを指す。そして第三の波を特徴づけるのは、子どもたちの能力と努力ではなく、親の富と願望によって受けられる教育が大きく規定されるシステムへの移行である。別の言葉で言うなら、メリトクラシーのイデオロギーから私がペアレントクラシーと呼ぶイデオロギーへの変化が起きたのである」

第一の波、第二の波については、次節で改めて論じることにする。上の引用のポイントは、世の中がメリトクラシーからペアレントクラシーに移行しつつあるという認識である。

イミダス時事用語事典^(注2)によると、ペアレントクラシーはサッチャーの教育改革によって、「学校の学力レベルや良しあしに対する関心が高まり、学校選択を行う保護者が増加し、教育機会・教育達成度が、家庭の階層的・経済的要因に加えて、家庭の文化的環境や保護者の積極的な教育支援に左右され、教育格差が拡大する傾向が強まった」として提起された概念ということである。

上の引用の最後の文においてブラウンは、「メリトクラシーのイデオロギーから私がペアレントクラシーと呼ぶイデオロギーへの変化」と表現している。

「イデオロギー」とは、「考え方」とか「理念」に近い言葉であるが、より突っ込んでいうなら、それは、「ある集団を結果的に利する考え方」というニュアンスをもつ社会学用語である。たとえば、「学校教育を受けることは万人にとって有意義なことだ」という理念があるが、現実の社会では各種の教育格差が存在しているため、学校教育のメリットを大きく受けるのは「富裕層」ということになりがちである。つまり、「誰にとっても大事だ」とされているものが、結局「もっぱら特定の人たちの得になっている」という現実があるわけだ。その時、見かけ上中立的な学校教育の理念は、特定の人たちを利するというイデオロギー的作用を持つということになる。

では、メリトクラシーのイデオロギーとは何か。次節で詳しく述べるが、それは端的に言うなら、「個人の能力と努力で人生は切り拓かれていく」という考え方である。これは私たちの生活に深く根ざした「常識」となっており、その意義は万人が認めるものである。ただし、貧困や格差といったテーマが日常化してきている今日、日本社会において本当にメリトクラシーがうまく機能しているかという点、大きな疑問符がつくと言わざるをえない。

「親ガチャ^(A)」という言葉が、最近はやっている。「親は選べない」「どの親の子として生まれるかが人生を決定する」ということを意味する言葉である。由来は、「ガチャガチャ」と呼ばれる、オモチャなどが入った丸い透明カプセルを販売する自動販売機。コインを入れ、商品を取り出すハンドルの回す際に「ガチャガチャ」と音がすることからこう呼ばれている。100円や200円を入れたらオモチャやフィギュアが出てくるわけだが、素敵なものが出てくるか、魅力のないものが出てくるかは、やってみないとわからない。運を天に任すようなものである。人間の運命も同じ。いわゆる「よい親」のもとに生まれるか、そうではないか。そうした事態を^や揶揄的あるいは自嘲的に表現する言葉が親ガチャである。

大学の授業でペアレントクラシーについて話したとき、学生たちがしきりに引き合いに出してきたのが、この、流行しはじめたばかりの親ガチャという単語であった。しかしなんと落ち着いた悪い、気味の悪い言葉だなと、私は違和感を覚えたものである。

いずれにしても、この言葉がはやる素地が、今日の日本にはある。どの家に生まれるかで子どもの人生に大きな違いが出てくるということを、人々は身にしみて感じている。学校教育が成立する前の世の中もそうだったのではないか、と思われるかもしれない。たしかに身分や家柄で人生がほぼ決まっていた時代があった。ただそれは、「見えるカベ」だったはずだ。今日の社会では、身分や家柄、あるいは貧富の違いによる社会的障壁は、公式的にはないことになっている。しかしそこには、「見えないカベ」が厳然と存在している。現代の子どもたちにとって、家庭環境の違いは決定的な意味をもつことが多い。

〈中略〉

21世紀を迎えた今日の先進諸国では、人々の人生は選択に基礎づけられたものとなっている。そ



の選択に決定的な役割を有するのが、親（家庭）が所有している種々の「富」と、子どもの教育・人生に寄せる「願望」だというのである。

ペアレントクラシーには、理念としての側面と実態としての側面があることに注意されたい。「理念としての側面」とは、親の選択の自由を最大限に尊重しようとする政治的スタンスのことで、本書 5 章で論じる、今日の新自由主義^(注3)的教育改革の底流をなすものである。前著『二極化する学校』で論じたように、この側面が公教育の「解体」をもたらしつつあると見ることもできる。他方、「実態としての側面」が、親ガチャという言葉で形容される、子ども・若者の間で見られる各種の「格差」の現状である。

筆者の考えるところ、ペアレントクラシーは、メリトクラシーの次に来る新たな時代というわけでもない。かつてヤングが警鐘を鳴らしたように、メリトクラシーの原理をつきつめるなら、その究極の形としてペアレントクラシーが立ち現れると考えた方が真実に近いように思われる。

(B) 「個人の能力と努力こそが大事だ」というメリトクラシーの理念は、近代社会を動かす機関車としての役割を果たしたと言っても過言ではない。ある時期たしかにメリトクラシーは、社会の進歩・発展のカギを握るものだとみなされていた。ただし、それはメリトクラシーが持つ光の部分である。モノには必ず表と裏の両面がある。ヤングが強調したのは、メリトクラシーがもつ影の部分のほうであった。すなわち、彼がその主著『メリトクラシー』という未来小説で描いたのは、能力原理による階級対立が顕著になった分断国家の姿であった。ヘタをすると、メリトクラシーの発展型としてのペアレントクラシーの社会は、かつての前近代社会のような、不平等と差別に満ちた社会に成り下がってしまうかもしれないのである。

(出典 志水宏吉『ペアレントクラシー～「親格差時代」の衝撃』、朝日新聞出版、2022年。問題作成にあたり本文を一部改変)

(注1) デューイ：John Dewey, アメリカの哲学者、教育学者。実用主義の見地から伝統的な教育を批判する教育哲学の体系を作り上げた。

(注2) イミダス時事用語事典：集英社が電子辞書やインターネット百科事典として発行している現代用語辞典。

(注3) 新自由主義：市場経済に対して個人の自由や市場原理を再評価し、政府による個人や市場への介入は最低限とすべきとして、民営化や規制緩和を提唱する思想。

- (1) 下線部(A)について、なぜ著者は「大きな疑問符がつくと言わざるをえない」と考えるのか、本文に即して 100 字以内で説明しなさい。
- (2) 下線部(B)について、「究極の形としてのペアレントクラシーが立ち現れる」と著者が述べた理由を本文に即して説明した上で、具体例を挙げてあなたの考えを 250 字～300 字で論じなさい。

〔Ⅱ〕

著作権の関係により、問題文を掲載することができません。

こちらの問題はアドミッションズセンターにおいて閲覧できます。

(出典 ステファノ・マンクーゾ, アレッサンドラ・ヴィオラ, マイケル・ポーラン (序文) 著
『植物は〈知性〉をもっている～20の感覚で思考する生命システム～』久保耕司 訳,
NHK 出版, 2015年。)

※参考までに設問を掲載します。

(1) 下線部(A)について、著者がこのように述べる理由を 100 字以内で説明しなさい。

(2) 本文の著者の主張を踏まえ、下線部(B)の著者の定義についてのあなたの考えを 250 字～300 字で論じなさい。